

白鷗大学論集 第28巻 第2号 (2014年3月)

## 資料

# 吉田瑞穂講述 「児童詩創作と作文の指導に関する要諦」

竹 長 吉 正

The Teaching Points of Composing Poems and Writing Essays at an  
Elementary School by Mizuho YOSHIDA  
TAKENAGA Yoshimasa

キーワード：吉田瑞穂、児童詩創作指導、作文綴方指導、昭和期の国語教育、百田  
宗治、千葉春雄

## はじめに

ここに資料として紹介するのは、わたくし（竹長）が吉田瑞穂に対して  
行ったインタビュー（聞き書き）の記録である。インタビューは、全3回行っ  
た。第1回は昭和55年（1980）12月11日（木曜）、第2回は昭和58年（1983）  
6月5日（日曜）、第3回は昭和61年（1986）4月13日（日曜）である。

全体のインタビュー構成は次のとおりである。

インタビュー第1回

1) 百田宗治先生のこと

- 2) 子どもの詩の歴史
- 3) 子どもの詩の呼び方
- 4) 子どもが書く詩の本質的な特徴
- 5) 子どもが書く詩のこれからの方向性
- 6) 大人の詩や他の子どもの詩を読ませる上での注意事項

インタビュー第2回

- 1) 短期大学で教えて
- 2) 田上新吉の『生命の綴方教授』
- 3) 千葉春雄先生の人と仕事
- 4) 私の考える教育ヴィジョン
- 5) 「生活文」という文種
- 6) 再び千葉先生のことについて
- 7) 綴方教師としての私の歩み

インタビュー第3回

- 1) はじめに
- 2) 子どもにとっての環境と表現
- 3) 子どもの作文を見る教師の力
- 4) 子どもに育てたい作文力——主題発見力・感受力など——
- 5) 「文話」と「文章研究」
- 6) 子どもの作文をこう読みます——吉田流の読み方——
- 7) 子どもに伝えたい三つのこと

吉田の口述を文章化するに当たり、基本的には話し言葉どおりの「です・ます」体を生かすように努めたが、「です・ます」体がわずらわしいと判断される部分に関しては「だ・である」体に改めた。よって、文末の統一がない。諒解していただきたい。

また、吉田瑞穂のことに関しては、拙稿「凡庸な詩人の勝利と敗北」(『白鷗大学論集』第28巻第1号 2013年9月)で詳しく述べてあるので、参照していただけたら幸いである。

## インタビュー第1回

時：昭和55年（1980）12月11日（木曜）午後2時30分～3時30分

所：吉田先生宅（東京都杉並区高円寺南）

### 百田宗治先生のこと

——<sup>ももた そうじ</sup>百田宗治先生<sup>(注1)</sup>は昭和30年（1955）12月、千葉県房総半島の家（安房郡岩井町久枝）で亡くなった。遺族は奥さんと坊っちゃん。先生は無宗教だから仏壇も位はいもない。<sup>たてやま</sup>館山で火葬した。伊藤整が「別れのうた」と題する追悼詩を一篇読み、最後に「先生、さようなら」と言った。帰りの列車で伊藤整が「人生はあっという間だね」と感慨深くつぶやいた。

先生は太平洋戦争の終り北海道に疎開していて、『北の子供』という雑誌で児童詩の選をしていたことがある。

先生は昭和の初め（7年ごろ）から生活綴方運動の児童詩教育に関係し、児童が児童自身の生活から詩作品を生み出すことを提唱した。これは北原白秋が雑誌『赤い鳥』で選をした児童自由詩のある面での継承であるが、又、ある面ではそれをのり越えた新しさをもっていた。先生は子どもたちに「詩を附与すること」でなく、「かれらからかれらへの詩を引き出すこと」を詩教育と考えた。つまり、子どもたちの生活とともにある彼ら自身の言葉表現を尊重し、それを引き出そうと努力した。それは詩評論家阪本越郎によれば「かれ（※百田）が青年期に情熱を燃やした人道主義の思想」の必然的な帰結であったともいえる<sup>(注2)</sup>。

先生が支援した児童生活詩の教育運動は時宜にかなって、全国に広まった。先生は各地から招かれて講演に出かけられた。

私（吉田）も先生の運動の協力者であったが、ほかに、滑川道夫・波多野完治・巽聖歌らも先生を支えた。

したがって、教育者、特に生活綴方運動に理解ある人々には先生の仕事は高く評価された。しかし、文壇や詩壇の評価は冷たく、黙殺に近かつ

た。いったい何故だろうと不思議に思う。

私の推測では、それは先生が文壇・詩壇から離れて別の面（教育の面）に入ったからだ。なぜなら、たいがい、別の面にいろいろと顔を突っ込む人間は腰がすわっていないと悪く言われるから。

しかし、先生と親しかった伊藤整はある追悼の日、先生に対して文壇・詩壇は冷たすぎるのではと言った滑川君に対して、「そう言っても、業績がね……」と言葉をよどませた<sup>(注3)</sup>。伊藤整の眼からすれば、百田先生は児童詩教育の方に力を注いだ分、自分の詩作の方は手薄になったということなのだろう。

やはり、人は両立ということがむずかしい。あちらに力を尽くせば、こちらの方が手薄になるということなのだ。

### 子どもの詩の歴史

——百田先生の亡くなった後、私と<sup>たつみ</sup>巽くん<sup>たつみ</sup>で『日本児童詩集成』という、やや分厚い本<sup>(注4)</sup>を出しました。この本は雑誌『赤い鳥』から始まった日本の子どもの詩の歴史を「児童自由詩」→「児童生活詩」→「昭和戦後(昭和20年8月～30年)の児童詩」という三つに分けて集めたものです。子どもの詩は大きく、この三段階で進んできた。

北原白秋が切りひらいた児童自由詩は、素材的に片よりがあったものの、子どもの感覚的なものを自由に解放させるという良い点があった。それは当時の文部省は、詩というと、あの外からわくをはめたようなリズムをもつ童謡ばかりをやらせていたからね。童謡のもつ、あの形式的なリズムと決別するところから白秋の児童自由詩は出発した。

しかし、白秋の児童自由詩は子どもたちが自分の生活をみつめて考えるという面が弱かった。対象を感覚的にとらえることはいいが、それがあまりにも感傷的であったり逃避的であったりすると、子ども自身が自分の生活をよくしていこうとする意欲や向上につながらない。これは昭和戦後の「たいなあ詩」<sup>(注5)</sup>が陥ったところと同じだ。子どもの詩がニヒルになった

り不健康になったりする。つまり、子どもの詩を指導する大人や教師の詩観が問われるのだ。私は白秋の詩観そのものに問題があったと思う。

そのことをはっきり主張したのが稲村謙一の『生活への児童詩教育』（厚生閣 昭和8年）だ。

また、詩のことばとしての表現について言うと、それは子どもの内部からわき起こる自然なことばやリズムにまかせるのがよい。末尾を例えば「すごいなあ」とか「うれしいなあ」と詠嘆調にしたり、あるいは、他人の詩の形式やリズムを真似して書かせるのは感心しない。

それから、白秋の時代は芸術主義で、作品のできばえだけを見たが、百田先生はこれを生活主義に変えた。つまり、子どもたちに詩を書かせるのは彼らの生活をみつめさせ、生活から材を得て、彼らの生活をより充実させていくためなのです。一つの教育的手段として詩を書かせたのです。それが百田先生の考えだった。

### 子どもの詩の呼び方

——はじめは「童詩」という呼び方をしていた。それを白秋は「児童自由詩」と呼んだ。さらに稲村さんの本が出て「児童生活詩」、そして今は単に「児童詩」と呼んでいる。「児童詩」というと、やや硬い感じがするので、やさしく「子どもの詩」ということがある。

### 子どもが書く詩の本質的な特徴

——昔は詩というと童謡、つまり、「うたう詩」という考え方が一般的でした。ですから、子どもが大人の童謡をまねて書くと妙な韻律がついて、詩がマンネリズムになるのです。今でも、「子どもが書く詩」に韻律がだいじだという主張もありますが、私はそのような立場をとりません。自然に出てくる韻律はよいが、はじめから韻律を意識させて書かせるのは邪道ですね。

対象を見たままに書くと、作品が平板になります。私は対象を見つめ、

とらえる子どもの心の動き、つまり、心理が大事だと思う。子どもの心理がその子の個性と切り結んで言葉となってあらわれてくる。それがいいんです。

素朴な写生だと、作品が平板で平面的になります。対象をとらえる見方を教えることが大事ですね。物をどういう角度から見るかです。物を見る目の位置が大事です。

横光利一や千葉亀雄が「新感覚」ということを言いましたね。彼らは客観と主観の融合した表現をめざしました。そういう表現を子どもたちにもさせたいですね。

ことばで情緒性を出したいですね。昔、厨川白村が「情緒性」ということを言いました<sup>(注6)</sup>。ことばで情緒性を出すには、ただ観察するだけでなく、そこから連想して考え、擬人的表現や比喩的表現をうみ出すに至る。子どもたちの表現はそうやって、ごく自然に擬人的表現や比喩的表現がうまれるのです。大人たちが意図的意識的に擬人法や比喩で表現しようとするのと違います。子どもたちは例えば蛍光灯のパチパチ点滅しているのを見て、「おじいちゃんが、ぜいぜいと苦しそうに息をしている。」って表現します。それは子どもがこういうことをどのように表現しようかと、頭の中で連想に連想を行い、自分の知っている、いわゆる「手持ちのことば」で、どうにかこうにか表現するんです。この場合、たいていの子どもは大人ほど、たくさんの言葉を知っていません。また、常識的な言い表し方を知りません。しかし、そのことがかえって新鮮な擬人的表現や比喩的表現をうみ出すことになるのです。それはまさに原始的なものです。この点において、子どもは専門家の詩人と似ています。なぜなら、大人の詩人はいつも、使い古された表現の仕方ではなく、新しい表現の仕方、つまり、新鮮な擬人的表現や比喩的表現をさがし求めているからです。大人の詩人が子どもの表現に興味・関心をいだくのは理由のあることなのです。

だから、もう一度言いますが、子どもは大人のように比喩や擬人法で表現しようとして、そのような表現がうまれるのではなくて、そんなことは

全く考えず、自分の表現しようとするものを手持ちの乏しいことばで表わすから、かえって、素朴ですなお、大人もはっと驚く表現がうみ出せるのです。

子どもに詩を書かせる時、先生はこのようなことを理解しておいてほしいですね。

### 子どもが書く詩のこれからの方向性

——六才の子どものつぶやきに次のものがあります<sup>(注7)</sup>。

- ① きれいな夕焼け  
トマト色の夕焼け
- ② 学校からかえると  
かぜ かぜ 風と麦とふたりで むぎ  
かけっくらしていました
- ③ 夕やけ 小やけ  
みかんの皮

どれもこれも、子どもの詩と言え言える。素朴で、実にすなおな表現だ。①は絵画的で色彩感もあり、しぜんな比喩表現もうまれている。②はことばに情緒性が出ている。つまり、子どもらしい友情の親しい気持ちが出ている。③は①と似て絵画的感覚でとらえているが、事象のとらえ方がうすっぺらだ。

③のような浅くて、うすっぺらなものを、どうやって高めていくか、それが教育上の課題となる。また、①や②もこれでは「つぶやき」であり「児童詩」と言えない。どうやって高めていくかである。

私はこれらの「つぶやき」を土台として、そこに知性を加えていく、そういう指導を行いたい。

①②③は、『赤い鳥』時代の子どもの作品です。白秋はこのような作品を選んだのです。すると、当時の小学校教員は白秋に選ばれるようにと、このような感覚的な作品ばかりを子どもに書かせようとした。ところが、

寒川道夫君が「白秋を斬る」という思い切った文章<sup>(注8)</sup>を書いて白秋を批判しました。これは白秋が自分の始めた児童自由詩がその後、綴方教師らによって生活行動詩になっていったことを彼自身が批判したことに対して、生活行動詩の立場に立つ寒川君が反論したものです。

子どもの詩を指導する教師に望みたいことは、ただ子どもの詩をどうするかだけでなく、子どもをいかに育てるかというヴィジョンをもってほしいということです。

それにはまず、子どもがこれは書きたいというものに出合わせることです。子どもがぶつかっていく環境をどう用意するか、作るかです。

それから、私が常日ごろ、「五大要素」と呼んでいるものを、教育実践の中で心がけてほしい。五大要素とは、次のものです<sup>(注9)</sup>。

- ① 知識
- ② 知性
- ③ 情操
- ④ 体力
- ⑤ 行動力

①の「知識」、これは軽視してはいけない。子どもが喜んで知識を身につけるよう、導きたい。②の「知性」、これは考える力のことです。そして、③の「情操」はゆたかに。④の「体力」も大事です。からだを丈夫にしましょう。そして、⑤の「行動力」、口先だけの人間にたくありません。

このような教育ヴィジョンの中で児童詩の教育を行ってほしいのです。

#### 大人の詩や他の子どもの詩を読ませる上での注意事項

——大人の詩や他の子どもの詩を読ませることは賛成です。但し、子どもに大人の詩をまねた詩を書かせるのはいけません。子どもには子どもにふさわしい詩の世界がある。また、友達や同年令の子の詩を読ませても、ことばをまねさせてはいけない、ものの見方や発想をまねるように指導した



い。そうでないと 剽窃<sup>ひょうせつ</sup>、盗作の問題が起こります。過去において、自分の詩を文集にのせたい、コンクールに入賞したいとして盗作が発生したことがあります。教師はこの点も注意すべきです。

## インタビュー第2回

時：昭和58年（1983）6月5日（日曜）午後2時40分～4時40分

所：吉田先生宅（東京都杉並区高円寺南）

### 短期大学で教えて

——昭和43年（1968）9月から57年（1982）3月まで約14年、大和学園女子短期大学（※のち、聖セシリア女子短期大学と名称変更）につとめました。学長さんが至光社の武市さんと知り合いで、保育科（※のち、幼児教育学科と改称）を作ったので児童文学を教える人を紹介してほしいと話した、それで武市さんから私のところへ話が来たのです。引き受けました。私はその時、小学校長をやめて 済美<sup>さいび</sup>教育研究所の所長をやっていたのだが、やめて大和学園に行った。週に2回、神奈川の大和まで通いました。学生さんはほとんど、卒業後、幼稚園につとめた。お嬢さんタイプというか、お母さんに甘えるような感じの女子学生が多く、講義もただぼんやりと聞いているようなので、私はある時から講義の原稿を作って、ノートがとれるようにと、ゆっくり話した。

### 田上新吉の『生命の綴方教授』

——田上<sup>たのうえ</sup>新吉さんの『生命の綴方教授』（目黒書店 大正10年）には大きな刺激を受けた。読後、感激して田上さんに手紙を書きました。そのころ私は佐賀にいましたが、私の作文指導の手引き書でした。また、田上さんの本と同じ時期に厨川白村の『近代文学十講』（大日本図書 明治45年）を読みました。これは京都帝大での講義テキストですが、これを読んで

「生命の情緒性」ということに初めて目を開かれた。田上さんの本と深いつながりのある本でした<sup>(注10)</sup>。

田上さんの本は今読むと、考え方は相変わらず立派だが、そこに採られている作品は古い、概念的です。

### 千葉春雄先生の人と仕事

——大正の終りの頃、私は佐賀県太良町の<sup>じん</sup>神野小で教えていた。その時何気なく見た『教育研究』で千葉先生の論文<sup>(注11)</sup>を読みました。綴方指導に関する先生の新しい考えを知りました。それで、さっそくその感想を手紙に書いて送りました。すると、お返事をいただき、また、先生の書かれた本を送ってくれました。

私は昭和3年の秋、上京します。先生は雑司ヶ谷に住んでおられた。奥さんと二人です。子どもさんはいなかった。先生は地方から上京してきたばかり、地方出身の若い教員によくつき合ってくれた。銀座へ連れて行って酒をのましてくれた。先生はゆどうふが好きだった。そして、この年、先生は『生活させる綴り方指導』（厚生閣 12月）という本を出された。「生活させる」という考え方が魅力的でした。先生は『生活に即く読み方——特に低学年の読み方』（厚生閣 昭和5年）という本も出しているが、とにかく、「生活させる」「生活に即く」ということばが好きだった。

当時、綴方の指導は盛んであったけれど、生活を主軸として行うというのは少なかった。千葉先生はこの点を問題にしたのです。要するに、生活表現の綴方という主張です。

しかし、千葉先生の研究にも弱点はあった。それは子どもたちにどんな生活をさせるかという具体性が不足していたことです。

子どもが自分の身のまわりのこと、つまり、生活ですね、それを見たまま、ありのままに書かせるという指導はありました。

そして、次に、生活を科学的にとらえる、「調べる綴方」が起きました。

そのうちに戦争となり、綴方教育は地に落ちた。

戦後、指導要領が出て国語の能力表が作られた。子どもに書かせる文種もふえた。生活文の他に、説明文・意見文と多様になった。また、作文の書かせ方も文章構成法などが出てきて、いろんな書かせ方をするようになった。

しかし、私が思うに子どもにどのような生活をさせるかという具体性にふれた提案は少なかった。作文指導ではどう書かせるかも重要だが、子どもをどう生活させるかが重要だと思う。それは子どもをどのように育てるかという教育ヴィジョンの問題である。教育にはヴィジョンがないと、ただ子どもをあずかっているだけで、大海をさまよう、ふらふら船になる。しっかりしたヴィジョン、それが船の羅針盤なのです。

### 私の考える教育ヴィジョン

——私は子どもを育てる教育ヴィジョンとして次の五つのこと<sup>(注12)</sup>を考えている。

- ① 知識を身につけさせる
- ② 知性をみがく
- ③ 情操をゆたかにする
- ④ 体力を養う
- ⑤ 行動力を養う

これらを培う方法として「享受」（受け入れて身につけること）と「表現」（表現して身につけること）の二つがある。

「享受」させてから表現へというコースをAコースとする<sup>(注13)</sup>。それは学校の教育課程の中の教科活動（例えば理科・社会科・国語科等の学習活動）と関連して表現させていくコースである。理科で植物の向日性や、植物が成長するための肥料の要素というものを教師の説明やテレビの視聴で学んだとしたら、その学んだことをじっさいに実験し、あるいは観察し、そのことをもとに記録文を書くというような学習活動である。戦前に行わ

れた「調べる綴方」は、まさにそのようなものであった。

これに対して、学校の教育課程とは別に家庭や子どもの属する地域社会で起こった出来事・体験について書かせるコースがあり、それをBコースとする。これは学校での「享受」させる活動とは別に、子どもが自由に学校外の生活でこれとは思ったものを表現させるのである。学校外の生活であるが、子どもがその中で書きたい題材を見つけ、主題を自覚していつて、ついに文章を書くとなれば、子どもはそのような一連の表現活動を通して、ものを見る力・ものをとらえる力・感じる力・考える力を自分で育てていくことになる。だから、学校外であっても、そのような「表現する生活」を日常的に心がけるように教師は子どもを育てていく必要がある。

Aコースにおいても、国語科だけでなく、理科や社会科等の学習で、観察文・記録文・報告文をよく書かせて日常的に「表現する生活」の大事さを意識づけることである。

「表現する生活」とは、子どもが出合う様々な事象の中に、表現する題材を見つけ、主題を自覚していく習慣・態度を形成していくことにほかならない。それは学校の内外において影響を持つ教師のぜひとも考えておかねばならない必須事項である。

### 「生活文」という文種

——戦後まもなく、西尾実さんと共同で作文の本<sup>(注14)</sup>を作ったことがある。その時、作文の文種(文章ジャンル)に「生活文」があったのを見て、西尾さんが「吉田さん、生活文というのは記録文でしょ」と言った。そして、生活文という形態をなかなか認めなかった。しかし、子どもが書く文章は生活文であって、記録も報告もみんな入っているんです。つまり、特に分けることをしないんです。西尾さんは最後は納得したけれど、中には「生活文」という呼称をいやがる人がいます。

しかし、寺田寅彦のような科学者の書く知的な文章には記録の要素もあれば報告の要素もあり、そして、その文章の底に流れているのは「情緒性」

です。「情緒性」とは厨川白村の言葉ですが、白村は「情緒性」こそが文章の核心になるものだと言っています<sup>(注15)</sup>。

ただ自分のしたことや見たことだけを書くのは記録文です。しかし、生活文はそれに自分の考えや情緒をつけ加える。子どもの書く文章、つまり生活文には、そのようなふくらみがあるんです。

だから、子どもたちが生活文を書くと、彼らの生活そのものを高めていくことになる<sup>(注16)</sup>。

### 再び千葉先生のことについて

——千葉先生は前にあげた『生活させる綴り方指導』（昭和3年）の他に『児童生活に即したる綴方<sup>その</sup>と其鑑賞』（目黒書店 大正13年）という本も出している。先生は子どもたちが自分の身のまわりの生活に即しつつ文章を書いていくことを奨励し、しかも、そうやって文章を書くことで彼らの生活を高めていく、そう考えられたのです。だから、教育において生活文は出発点であると同時に到着点でもある、先生はそうのように考えられた。

ところで、千葉先生の綴方教育の方法論で大事なのは「<sup>ろうさ</sup>労作」ということです。子どもに表現能力をつける上で労作が必要だという考えです。しかし、「文章の上に労作させる」といっても、文章をあれこれ書かせて子どもをいじめることじゃない。「てごろな作業化をさせること」です。

千葉先生は『綴りかたのおけいこ』という本、今日風に言えばワークブックですが、これを全22冊書いて、この作業化の具体案を示した<sup>(注17)</sup>。

千葉先生のところへ、地方からやって来た者がずいぶん集りました。ばくもそうだが入江道夫、近藤益雄、他数人います。入江君は昭和9年から11年にかけて千葉先生の片腕となって編集の仕事を手伝っていました。その後、千葉先生が独立して東宛書房<sup>とうえん</sup>をおこした時も一緒にした<sup>(注18)</sup>。

千葉先生の本で忘れられないのは、『児童文の 批評と鑑賞と文話と<sup>みかた</sup>観方の研究』全6冊（厚生閣 昭和7年）です。子どもの文章について実によく、ポイントをとらえた本です。先生は日本全国から送られてきた文

集をよく読んでおられた。そして、この本を書かれたんです。また、私たち若い教師がよく厚生閣へ行き、先生がこの本を書かれる材料を提供しました。

### 綴方教師としての私の歩み

——綴方教師としての私の歩みは、だいたい次の五期に分けることができる。

#### 第Ⅰ期 新卒の頃・佐賀時代

子どもが身边で見つけたものを書かせた。例えば「ホタル狩り」とか「山へ行ったこと」などという題で、書く材料を見つけさせて書かせた。

#### 第Ⅱ期 上京して第三大島小で教えて

上京して東京の下町、工場地帯の子どもを教えた。方法的には第Ⅰ期と同じだが、子どもの書く材料がそれまでの農村地帯とまったく変った。これについては「煙の町の童詩指導」という文章<sup>(注19)</sup>で一部、報告した。また、印象に強く残っているのは、隅田川から江戸川につながる運河に浮かぶ舟で、子どもが親から言われて、舟が沈まないように水をくみ出す仕事をしたこと、それを作文に書いた子がいた。子どもが自分の仕事と親の仕事とを实によく観察して書いていたので感心しました。これは昭和3年の頃です。

#### 第Ⅲ期 第三大島小で教えて—その後期

第三大島小での教員生活に慣れてきたので、新しく「調べて書く綴方」を始めた。子どもたちにもものごとを科学的に追求する力、認識を深める力を育てようとして、まず、調べることをさせ、記録文を書かせました。例えば「荒川放水路を人は何のために作ったのだろうか？」という問題を出して調べさせました。子どもたちは調べることで自分の住む地域の理解が前よりも深まりました。

これは昭和4年から6年にかけてのことですが、綴方の指導と併行して詩を書かせる指導にも力を入れました。

#### 第Ⅳ期 山の手、杉並区に移って

昭和11年、東京の山の手、杉並区の小学校に移動しました。生活綴方の仲間から「吉田は山の手に行ったから、もう、生活綴方はできないだろう。」と言われた。しかし私はこう反論した、「生活というものは、労働や生産ばかりではない。山の手、住宅地帯に行っても、そこには住宅地帯なりのいろんな生活がある。それを子どもたちに見つめさせる。」と。そして、杉並の子どもたちに自分の生活に取材した綴方や詩を書かせ、文集も作った。

#### 第Ⅴ期 杉並で教えて—その後期

戦後、綴方から作文へと名称が変わり、指導方法も多様化しました。子どもたちが自分の身のまわりに在るものを拾って書くばかりでなく、例えば自分たちでテレビ局へ行って取材して書くとか、あるいは、想像したことを童話に書くとか、私の実践でそれまでにやらなかったことをやりました。子どもにとっても挑戦でしたが、もちろん、私にとっても大挑戦でした。この時期は新しいメディアとしてテレビが登場したので、さっそくそれを取り入れて作文の材料としたのです。また、生活綴方ではそれまでリアリズムの文章、つまり、写実の文章ばかり書かせてきたのですが、これからの時代には虚構の文章、つまり、フィクションの文章も書かせる必要があると考えたのです。子どもたちはどれも意欲的に取り組みました。

綴方教師としての長い私の歩みをふり返って言えることが二つあります。その一つは、どの学校へ行ってもその地域そここの子どもたちの実態に合った作文指導ができるということです。もう一つは、昔の作文指導の良い所はしっかり吸収して継続すると同時に、新しいメディアや状況に応じて、作文指導の新しい試みにチャレンジするということです。

この二つを意識して教員の皆さんにはやっていただきたい。

## インタビュー第3回

時：昭和61年（1986）4月13日（日曜）

午前11時20分～12時10分、午後1時10分～1時50分

所：吉田先生宅（東京都杉並区高円寺南）

### はじめに

この日、わたくし（竹長）は久喜発8時19分。南浦和で武蔵野線に乗り換えて西国分寺へ。山本和夫先生の宅を訪問した。この4月、できたばかりの本『児童文学の表現構造』（教育出版センター刊）を持参し、2冊謹呈した。山本先生にはこの本の序文「虹を背景に」を書いていただいた。御礼にコーヒーのギフトセットを進呈した。謝金を出そうかとも思ったが、同郷のよしみ、師匠からのプレゼントと勝手に解釈し、しごく簡素な謝礼で、かんべんしてもらった。応接間で40分ほど話をうかがった。福井県の若狭地方に歴史民族資料館をつくることに対して、県会議員や政治家になかなか理解が得られなかったことに関して「あの人たちには芸術や美の有用性が認識されていない。実に残念だ。」と言った。また、「西洋人の美的センスは概念的合理的考えに基づいている。それに対して東洋人の美的センスはもっと深く、味わいがある。我々日本人はこのことにもっと誇りをもつべきだ。」と言った。そして、そこまで送ろうと言って家の外に出た。駅の近くで「失礼します。きょうは本当にありがとうございました。」と言うと、「これからも、どんどん書けよナ——。」と言って手を振った。これは山本先生のいつもの口ぐせだったが、この時ばかりはぐっと胸に迫った。

それから、わたくしは西国分寺から国分寺に出、そこから中央線に乗って荻窪へ。荻窪から地下鉄で新高円寺へ。駅から歩いて吉田瑞穂先生の宅を訪問した。吉田先生の家に入ると11時20分。これは困った、お昼時だと思ったが引き返すわけにいかず。娘さんの翠<sup>みどり</sup>さんが「お昼まだでしょ



う？ うな重をとりましたよ、お父さん。」と言って出前をごちそうになった。吉田先生にはこの本『児童文学の表現構造』の中の「〈作品評〉 幼年をたのしませる空想の世界」を執筆してもらった。この作品評は当初、創作集として出すはずの本が出せなくなったので、このような形で掲載せざるを得なかった。吉田先生にはまことに申し訳ない仕儀であった。それでも先生は文句一つおっしゃらず、「好い本ができて良かった。」と破顔一笑された。わたくしは「粗品ですが、どうか受け取ってください。」と言ってセイロン紅茶の詰合せ（三箱入り）を差し出した。「ごていねいに、ありがとうございます。」と翠さんが脇で受け取られた。

この日、昼食をはさんで約1時間半、吉田先生からお話をうかがった。当日のメモをもとに復原すると、次のとおりである。

- ① リアリズムから入ってロマンチズムにぬける。それが好い詩だね。  
例えば作者が自分の生い立ちや生活をうたう。これはリアリズム。そして作者が自分の発見したものをうたいあげ、空へ飛び立つ。つまり、飛行機が離陸する感じ、これがロマンチズムだ。
- ② 子どもに読ませたい詩というのは、子どもの気持ちをよくつかんだ詩だ。ぼくは少年詩を書く時、子どもの生活心理の発達段階をふまえようと心がけている。高田敏子さん、新川和江さん、井上靖さんにとっても好い少年詩がある。
- ③ 児童詩（子どもの書いた詩）の好さがわからない大人（親や教師）がたくさんいる。彼らを啓蒙する必要があるね。ぼくの年来の宿題は『児童詩原論』という本を書くことだが、その本の最初に「児童詩、この好きものよ！」という文章を書く。
- ④ 子どものすぐれた所は主観と客観の融合した世界をやすやすと書けることだ。子どもは無意識にそうした世界を詩に書ける。大人の詩人はそれを意識的につくり上げる。まど・みちおや谷川俊太郎、みな、そううだ。だから大人は子どもの無意識に書いた詩をほめ、たたえてあげ

るとよい。

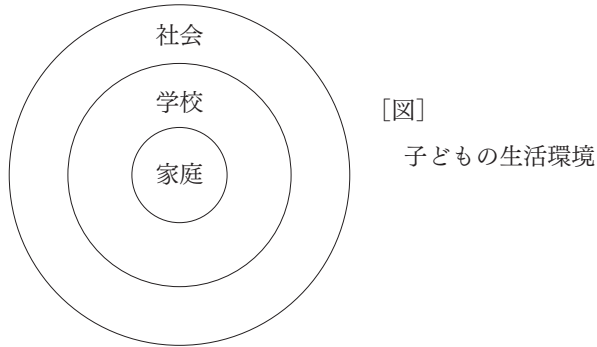
- ⑤ 子どもの詩で「たいなあ詩」なども面白いが、子どもに書かせる詩で最も基本的なのは、やはり、リアリズムの詩でしょう。ぼくはそう思っている。それは芸術的ということよりも、むしろ、生活的、教育的ということを考えるからだ。子どもの生活や心理を教育の営みの中で考えようとする、「たいなあ詩」のような行き方に賛成できない。  
小海永二<sup>こかいえいじ</sup>さんなどは「たいなあ詩」を評価するが、それは大人のポエジー観に沿って考えるからだ。
- ⑥ 学校で行う「詩をつくる教育」は子どもたちを詩人にするためではない。俳句や短歌を作らせるのが俳人や歌人にするためでないのと同様です。ことばに関する感受性や想像力をつちかうための一つの方法なんです。

以上は吉田先生と雑談の中で、吉田先生が語られたことである。

次にテープレコーダーのスイッチを入れ、前回（第2回、昭和58年6月5日）に聞きもらしたことを質問した。以下は、その記録である。

### 子どもにとっての環境と表現

——子どもにとって一番身近な環境は、何といっても家庭ですよ。作文コンクールの審査で子どもたちの作品を読みますが、子どもたちが一番多く書いているのは、家庭の生活、家庭の中での自分です。次に学校、学校の生活ですね。つまり、学習的なもの、集団で行ったもの、友だちです。そして、その外側に社会がある。テレビなどから得るものも、この中に入ります。



このような自分たちを取り巻く生活環境の中で、子どもたちは自分のアンテナにふれたものを書くのです。

私がこれまで教えてきた佐賀の地方、東京の下町、東京の山の手、それぞれ環境の違いによって子どもたちの書く文章に違いがありました。つまり、それぞれが何を書くかという「書く対象」が異なるのです。しかし私はどの子どもにも、対象の中に何かを発見していくようにと指導しました。対象の<sup>ゝゝゝ</sup>とらえに表現活動を推し進める機微がある。

また、対象はじっとしていることもあれば、動くこともあります。そして、対象が動き出して変わっていきますね。すると、それに応じて子どもの心理・感情も変化します。

子どもが対象にどのようにふれているか、教師はこれを見なければならぬ。つまり、対象と子どもの切り結びです。その子が対象をどのようにつかんでいるか、この深さが「生活感動」というものです。

### 子どもの作文を見る教師の力

——子どもがいくら良い作文、すばらしい作文を書いても、それを見る教師の目が育っていなければ何にもなりません。

教師は子どもの作文の見方を勉強する必要があります。子どもの作文を見て、教師がまず見るべきは、その子が何をどう書いているかです。そし

て、胸に訴えてくるものがあるかどうかです。そのために教師は直観力と鋭敏な感受性をもっていなければならない。教師の直観力や感受性がにぶっていると、子どもの何をや、`はとらえられません。

千葉春雄先生が子どもの文章の見方について6冊の本<sup>(注20)</sup>を書かれたのは、教師がそのための直観力や感受性を養うことを伝えたいからでした。千葉先生の本を読んで、ああそうだと思うことも大事ですが、そのことよりも、教員の一人ひとりが自分の受持ちの子どもの作文をこのように見て鑑賞し、批評する力を養ってほしい、私はそのように思うのです。

### 子どもに育てたい作文力——主題発見力・感受力など——

——子どもが自分の身のまわりの生活の中に、主題を発見する力、それを養いたいですね。取材するということは、対象の中に何か意味あるもの・価値あるものを見い出していくことです。それができれば、非行とかいじめはもっとへるのじゃないですか。そういうことをさせていないのかな、今の教育は。

今の若者は感じる力が劣っているように見えます。テレビやいろんな機械が発達して暮らしが便利になった半面、感じる力が弱くなっていませんか。対象に向かってどう感じ、何をとらえるかが作文では重要なんですが、感じる力が弱いと表現するところまでいかないんです。

感じる力を養うこと、これは教育の大きな仕事です。子どもたちの心が立派になるには、生活の中での主題発見力や感受力がとても大事なのです。

また、作文ではよく、リアリズムということを言います。しかし、写生だけではものたりない。そこに自分の希望や理想をプラスしていくことが大事です。対象をただ写しとることにとどまっていはいけません。対象に対する自分の反応を組みこんでいくんです。

### 「文話」と「文章研究」

——主題発見力や感受力、直観力などは大切な力だとわかっているが、教

師はなかなかそれらを育てられない、そんな悩みがあります。つまり、それらは指導できないと、そのむずかしさを言う。しかし私は簡単なことを言う。「いい表現」「すぐれた表現」をたくさん読ませることをやってみてください、と。子どもの書いた良い文章をたくさん読ませ、感じる力やとらえる力を養っていくのです。そのためにはまず、先生がやることです。

このことに関して、「<sup>ぶんわ</sup>文話」ということについて述べておきましょう。「文話」とは今の人には聞き慣れない言葉ですが、昔はずいぶんはやった言葉です。これは、ある文章の良いところを取り上げて、いろいろと鑑賞することです。これをむずかしく言うと、「文章研究」です。つまり、文章についての研究です。「文話」は先生が良い文章を取り上げて、その良いところを子どもたちに具体的に鑑賞させるのですが、「文章研究」は子どもたちが主になって鑑賞や批評をします。これは理解と表現をつなぐ学習活動で大いに力がつきます。

「文話」にしても「文章研究」にしても、対象の文章をただ読ませるのではなく、書かせることを想定して読ませるのです。これは、ただ読むだけというのと大いに違います。書かせることを読む態度・<sup>かま</sup>構えとして持たせていますから、読むのにも力が入ります。真剣に文のあちこちに目が行きわたります。そして、文の書きあらわし方だけでなく、対象のとらえ方や、ものの見方まで研究させます。こうして子どもたちが自分で作文する時の力になっていくのです。

### 子どもの作文をこう読みます——吉田流の読み方——

——子どもの作文を私はこういう順序で読んでいます。最初に、全体をとおして読みます。

直観をはたらかせて全体を読みます。次に、もう一度読んで、文の中心点をつかみます。最後に、一步はなれて批評を書きます。

言葉や文をとおして私に訴えてくるものをとらえようとして読む最初の

竹 長 吉 正

読み（初読）が基本ですね。やはり、訴えてくるものを直観することが大事。だから、日々、直観力や感受力がおとろえないように努力しています。

### 子どもに伝えたい三つのこと

——子どもに文章を書かせる時、私が日ごろ伝えていたのは次の三つです。

第一に、「行動した順序で」書きなさい。

第二に、「ふだん使っている言葉で」書きなさい。

第三に、「感じる力」を養うために、たくさん読みなさい。

特に第三のことに関連して言うと、国語の教科書には作文の参考になる「良い文章」をたくさんおのせてほしいですね。

また、作文が上手になりたいという子どもには、たくさん本を読むことを勧めます。

「よく書くためによく読む」、これを言いたいですね。

## 注

- (1) 百田宗治（1893 - 1955）は大阪生れの民衆派詩人。詩誌『椎の木』を主宰し、伊藤整・阪本越郎・蒲池歓一らを世に送り出した。また、吉田瑞穂・刀襦勇治らの教員詩人を育てた。生活綴方運動にも理解を示し児童詩教育の発展に力を尽くした。
- (2) 久松潜一ほか編『現代日本文学大辞典』（明治書院 昭和40年11月）所収、阪本越郎執筆「百田宗治」の項参照。
- (3) 工程・綴方学校復刻刊行委員会編『工程・綴方学校 復刻版 月報No.15』（教育史料出版会 1982年2月）所収、滑川道夫「『童詩読本』のころ」参照。
- (4) 百田宗治編『日本児童詩集成』（河出書房 昭和31年8月）。「解説」を吉田瑞穂と異聖歌とが書いている。百田の編となっているが、実質的な仕事をしたのは吉田・異の兩人である。
- (5) 松本利昭らによって提唱された児童詩教育の理論と方法。詳しくは松本の著書『こどもの欲望を掘りおこそう——こどもの詩と教育——』（少年写真新聞社 昭和42年4月）参照。

- (6) 吉田がここで述べている厨川白村の「情緒性」ということについて詳細は不明である。厨川の『近代文学十講』に「生命の情緒性」ということばを見つけるのは難しい。ただ、吉田が田上の『生命の綴方教授』との関連で厨川の『近代文学十講』をあげているのは、両者の近似性において納得することができる。ベルグソンの生命主義哲学の影響を受け、近代思想の反映たる「近代文学」と「子どもへの綴方指導」とを関連づけようとする田上は、当時、吉田よりも早く厨川の著書にふれていた。よって吉田は田上の『生命の綴方教授』に感激し、さらに、その藍本<sup>らんぽん</sup>的存在の『近代文学十講』にまでさかのぼっていったと見ることができる。但し、厨川の『近代文学十講』にベルグソンの名は出てくるが、そこでの言及はわずかである。吾々人間が日々の生活の中で抱く「情調」(※「情緒」ではない)は「感情」以前の複雑微妙なものであり、「感情」として集積する以前の「感覚乃至神経から来た情調」を歌おうとする「新しい象徴主義の文芸」(ホフマンスタール等の新芸術)という文言があり、これに魅かれて吉田は「生命の情緒性」(あるいは情調性)という言葉を出したのではないかと推察する。
- (7) ㉔は川上大三郎(東京市・湯島)㉕は林 三一(神奈川県・林岡)の作。㉔は未詳。㉔㉕は前出・(注4)の『日本児童詩集成』に所収。
- (8) 寒川道夫「提言を斬る」(『綴方生活』昭和11年10月号)。吉田は「白秋を斬る」と述べているが、正しいタイトルは「提言を斬る」。雑誌『綴方生活』の第二次同人宣言(昭和5年10月)の担い手たちに対して『赤い鳥』運動の指導者たち(鈴木三重吉、北原白秋)は批判を行った。具体的には鈴木『綴方読本』(中央公論社 昭和12年)や北原の「提言」(『綴り方倶楽部』昭和6年11月号)がそれに該当する。それは運動論的に言えば、いわゆる「先行者による巻き返し」であるが、それらに対して第二次同人宣言の担い手たちは再び、批判を行った。寒川の「提言を斬る」はその一つである。
- (9) 「五大要素」については、この後の第2回のインタビューの中にも出てくる。また、吉田瑞穂「作文教育の実践構想」(『月刊国語教育研究』132号 1983年5月号)で「私の教育のビジョン」として述べられている。
- (10) 前出・(注6) 参照。
- (11) 千葉春雄は雑誌『教育研究』に次のような論考(※一部、省略)を発表している。大正14年1月(282号)「国語教育私考」、14年2月(283号)「朱い卓子の一端から」、14年9月(293号)「読方教育概論(一)」、15年4月(301号)「読方教育概論(五)」、15年10月(307号)「綴方に於ける生活指導論考」。これらのタイトルから吉田が千葉のどのような面に魅かれたのかの一端をうかがい知ることができる。
- (12) 前出・(注9) 参照。
- (13) ここで述べているAコースとBコースについて、吉田が比較的、早期に述べているのは彼の著書『新しい作文教育の探究』(明治図書 昭和37年10月)である。この本の中で吉田は「生活を把握して表現へ」という書かせ方をAコースとし、「生活させて表現へ」という書かせ方をBコースとしている。この場合、子どもたちに学校外の日常生活の中から「書くべきことから」を見つけさせて書かせるのがAコースであり、理科や社会科などの教科学習と

関連させ、その学習の中で実験・観察などの体験を通して認識したことを書かせるのがBコースである。しかし、このインタビューではそれが逆になっている。すなわち、ここでは、「生活させて表現へ」がAコース、「生活を把握して表現へ」がBコースとなっている。また、前出・(注9)の吉田の論考「作文教育の実践構想」(1983年)では、このインタビューで述べているのと同様、「生活させて表現へ」をAコース、「生活を把握して」(※1983年では、この部分をさせてと表記)表現へ」をBコースとしている。なぜこのような変更が起ったのか不明であるが、吉田としては従来の綴方作文指導でも行われていた「生活を把握させて表現へ」という方法もさることながら、それよりもっと今日的に重視したいのは「生活させて表現へ」の方であるとの思いを強く打ち出したかったからだとわたくしは考える。「生活させて表現へ」の方をAコースとして先に出した所以についてわたくしはそうのように考えている。

- (14) 西尾実・吉田瑞穂監修『講座 作文の指導』全7冊(明治図書 昭和29年～昭和30年)。小一～小六各1冊、中学1冊。当初は全8冊の計画で最終巻として吉田の本が予定されていたが諸般の事情により出版されなかったという。しかし、後の(注16)で言及する『文を見る目と指導』(明治図書 昭和30年6月)がこれに該当するのではないかと推測する。
- (15) 厨川白村が述べているという「情緒性」については前出・(注6)で述べたように出典不明である。吉田は「生命の情緒性」ということを白村の『近代文学十講』(明治45年3月)から学んだと言っているが、この本は外国(特にヨーロッパ)の近代文学についての白村自身の鑑賞を混じえた文芸思潮史であり、文学の特性について原理論を説いたものとは言い難い。生命主義的な観点から文学の特性を説いた白村の著作に『苦悶の象徴』(大正13年2月※白村の遺稿で死後出版)がある。この著作の「第一 創作論」「第二 鑑賞論」に文学の特性にふれた箇所があり、吉田に影響を及ぼしたと考える。吉田は『苦悶の象徴』の著作名が浮かばず、白村の著名な書物『近代文学十講』で、その影響ぶりを代替させたのではなかろうか。
- (16) ここで述べている吉田の文章観を知る上で参考になるのは、吉田の著『文を見る目と指導』(明治図書 昭和30年6月)である。その70ページには次のように述べられている。

ある理科の専科の教師が「子どもの理科の観察記録には、情緒的なものがあるてはいけない」といった。この筆法でいくと、子どもの社会科の見学記録には、情緒的なものがあるてはならぬ……ということになるかもしれない。

しかし、そうではない。

子どもの書く理科的な観察記録や、社会科の記録は、子どもの行動が主軸となり、それと連関して、知的なものと、情緒的なものはこんぜんと融合しながららせんをえがいていくものである。(※圈点原文)

知的なものと情緒的なものとが融合しているのが「子どもの生活文」だと



吉田は言う。それが子どもの書く文章の実態であり理想形態であるとするなら、あるがままを認め、それをさらに純化する（エラボレートする、磨きあげる）のが教育者の務めだということになる。

しかし、ここでわたくしの考えを述べると、それは確かに子どもの書く文章の実存の実態であるが、小学校六年間を通して、このような「生活文」ばかりを書かせていけばよいのかどうか疑問である。例えば理科の観察記録や、社会科の見学記録において、低学年では「情緒的なもの」が混在しているも許容されるとして、高学年でもそれが混在しているも許容されるかどうか疑問である。子どもの発達段階を見据えて作文指導はなされるべきであり、いつまでも「生活文」一辺倒ではいけないのではないかと思う。知的なものと情緒的なものが融合している「生活文」は確かに、子どものある発達の途上において、「この良きものよ！」であるが、それは万全万能ではない。そして、子どもたちの作文指導において、いつかは、「知的なもの」と「情緒的なもの」を切りはなして、「知的なもの」は「知的なもの」でその表現の充実性を図り、また、「情緒的なもの」は「情緒的なもの」でその表現の充実性を図る、そのような指導がなされるべきだと考える。

- (17) 千葉春雄の『綴り方のおけいこ』は『生活させる綴り方指導』に基づくワークブックで、その初版が昭和3年から4年にかけて厚生閣から出版された。尋常科用全18冊（尋一～尋六、各学年3冊※学年別学期別）高等科用全4冊（高一～高二、各学年2冊※前期と後期）。いずれも六〇ページ前後の小冊子である。これには『綴り方のおけいこ指導法』と題する教師用書が全8冊ある。また、千葉は他に『綴り方家庭学習』と題する家庭用自習ノートを全8冊出している。これは各冊二五〇ページ前後で、末尾に解答例が載っている。
- (18) 千葉春雄（1890-1943）は1921年（大正10）5月から1929年（昭和4）8月まで約8年、東京高等師範学校訓導を勤めた。その勤務の後半は特に綴方指導に力を入れ、『生活させる綴り方指導』（昭和3年）『綴り方のおけいこ』（昭和3～4年）『綴り方のおけいこ指導法』等を完成した。東京高師の訓導を退職した千葉はその後、厚生閣を中心とした教育ジャーナリズムの世界に入る。雑誌や本の編集を主とする生活の中で若い教員に発表の舞台を与え、教育人としての成長を鼓舞した。
- (19) 吉田瑞穂「煙の街の童詩指導」は千葉春雄編『新童詩の理論と指導実践工作』（東宛書房 昭和9年9月）に所収。なお、吉田のこの論考についての詳しい考察は竹長著『わかさ美浜教育史1』（美浜文化叢書刊行会 2011年3月）「第二部第二章 民衆の視座に立つ文学教育実践史」で行っている。また、吉田が東京市第三大島尋常小学校に在職中、昭和8年（1933）9月、若い柳内達雄が東京府多摩郡の平山尋常小学校から転任してきた。吉田は22歳の柳内に熱心に綴方指導を勧めた。柳内は昭和9年（1934）同校で行われた綴方研究会で授業を公開した。その授業は自分では満足のいくものではなかったが、以後、綴方の指導にしぶとく取り組むきっかけとなった。詳しくは、柳内達雄「偶然の出会い——生活綴方・あの日・あのこと」（『作文と教育』1976年3月）参照。

竹 長 吉 正

- (20) 千葉春雄『児童文の 批評と鑑賞と文話 観<sup>み</sup>方<sup>かた</sup>の研究』全6冊（厚生閣昭和7年）。この本について吉田はインタビュー第2回の「再び千葉先生のことについて」でふれている。

（本学教育学部教授）